

人にやる気・村に活気・地域づくり学習会の意義

松本大学地域総合研究センター
研究員 玉井 袈裟男

みなさんこんにちは。顔見知りの方の多い中で改めて話をするのはまことに、なんだか身内の前で話をするようなもんで、調子が狂っちゃうんですね。よく見るとみんな知ったような顔ですね。それで私に与えられた時間が1時間ということではありますが、その1時間の中で何を話せるかと考えてみましたら、結局ですねこれ、いい年をしておりますので、まゝこのあとからお話になる松葉さんが本論で、私はその序論といいますか前書きくらいのもんだと、こう思っております。

1. 松葉さんとの出会い

なぜこのような試みを始めたのかといいますとですね、みなさん、表1「松本大学地域総合研究センター地域づくり学習会・研修旅行計画」というのがありますよね。これは、つい今年の8月です。この松葉さんに来ていただきまして梓川村の梓水苑（しすいえん）でですね企画実践塾の塾生たちに話をさせていただいたわけではありますが、その時私はその話を聞いて、そしてやっぱりこれは現地に行ってみなければいけないと、こういうふうに思いました。そしてまた現地を訪問させていただいて益々これはしっかりと学習しなきゃいけないなあと、こういうふうに思ったんです。といいますのは、まゝ後で聞いていただければ分かるんですが、松葉さん、まだ若い、働き盛りの人ですね、50代バリバリです。私は77歳です。そうしますとですね自分がこうだんだん衰えていってしましますが、しかしそういう働き盛りの、映画で言えばコンバットの中のサンダース軍曹みたいな人が出てこられてるんですが、そこでまゝこういう人がいてくださって、また農村の将来も確かな歩み続けるひとつの指標になるなど、こう思ったんです。若干若いから暴れ馬みたいに少しこの、荒いところがありましてね、ところがですね、その松葉さんがお帰りになる時に私が梓水苑の前で立ってお見送りしたんです。するとまっすぐ西に約150mそれから真横（北）に約150mそれでまた縦（東）に150mが玄関に立っているとこの私の目に入る視野です。で私は立ってたんです。そしたら松葉さんはですね窓から顔を出して150mの間にですね2回手を振られました。あゝ、振り返ってご覧になっているなあと、こう思ったんですよ。そしたらまた横に150m走る間にまた2回手をお振りになったんです。また曲がって、普通ですとスーッと行ってしまおうんですが。それは遙かかなたですよ、遙かかなたからまた2回手を振ってご挨拶なされた。私はこの長い人生の中でですね、「別れる時は3度振り返れ」と、こういうことを教わったことがあるんです。まゝ「さよなら」ってスーッと行っちゃったってそれでいいんですけど、どっかに見送ってる人がいるかもしれないから、ね、3度振り返るもんだということも教えてくれた人がいたんです。そんな些細なことによって、なんといいですか、深いつながりを得た人が何人かおられます。私もまた別れるときは3度振り返る。振り返ったら誰も送ってないということがほとんど大部分ですが、しかし振り返ったときにそこに誰か立っていたらですね、あゝそこになんといいいですか、人間の心のつながりというものがあるんだなあと。それで私は松葉さんという人を、そのようにですね3度振り返っただけじゃないですね、6回振り返ったですね。6回振り返ってくださった若い元気の盛りのね、馬で言えば後ろなんか向かないで走って行ってしまおう人なんですけど3度振り返ってくださったと。

あぁこういう人にして清見村のですね、しみじみとした村づくりができたんだなと、こう思ったんです。これはま、私は自分たちがですね、そこから教えをいただくにふさわしい人だなと、こういうふうに思ったんです。

2. 「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会の意義」

私の経験から

これはほかならぬ、その松葉さんの清見村へ行ってですね、そして一晩、ホテルパスカル清見、村営のホテルですが、そこへ泊まりまして、それで塾生たちと一緒に夜、懇親会。村長さんが出てきてくださった。そしてまた、その松葉さんが出てきてくださった。いわゆる村の中心の方2人が出てきてくださったわけですね。ところが酒が強いんですよ。もういくら飲んだって大丈夫なんですよ。村長のほうが俺より強いなんて松葉さんはおっしゃったのですが、僕は村長さんの隣にいてとてもじゃないが追いつかないです。それで、なんてま、これ、清見村は酒飲みばかり揃ってるんだらうと、こう思ったんですが。実は酒を飲んでですね、この丸裸になって本心剥き出しになって、時には喧嘩することもあるかもしれないけど、本心剥き出しで話し合っただけで、それが役場の中の人間関係をですね、深めていったのかなと。ですから役場の中の、なんていうかな、人たちの息がピタリと合っているんですね。ですからその、松葉さんだけ飛びぬけて、こっちからは見えちゃうんですけど、私はそのあといろいろな施設を見せてもらいましたね、堆肥センターなんてのも見せてもらいました。そうするとその堆肥センターのトップに立っている人がですね、そりゃまた立派なんですよ。ほ、やっぱり事業だけじゃないんだと、これは事業を通して人間がこれほどまで成長するもんかなとということをつくづくと思ったわけです。それからまた、育苗施設なんかがありますが、そこへ行くともまたその責任者が出てくるんですが、それがまた立派なんですよ。実に立派なんです。特に堆肥センターなんてのはあっちでもこっちでも農協経営の堆肥センターなんてのができますけれど、大体あれ儲からない仕事ですから、みんな放ったらかしになって、それでそのうちにですね毎日掃除やればいいのに3日に1ぺんぐらいになったり、そのうちにやらなくなったりして、それで汚くなって臭くてそれでとても人に見せられるようなものじゃないんですが、あそこは匂いなんかひとつもしません。きちんと片付けております。あれ見ただけで、「あそこはちゃんと経営が成り立ってるんだな」と、こういうふうに思ったんです。

そういうことを思いながら帰ってきたんです、その次に明宝村ってのがあるんです。ここはそんなに詳しく見たわけではありませんが、明宝村でご案内に出てくださいました方が商工観光課長の国田(くにた)さんって方でありました。それで短い時間ですから話だけですけども、場所を移動する時に私はその国田さんと一緒にそばに寄り添って歩いて行ったんです。そしたらその国田さんが前の村長つまり別の名前の村を名前が悪いから明宝村に変えた人なんです、その前の村長これは「すごい人で、とにかくコキ使われたと、激しい労働だった」とそこまでならいいんですが、その時に小さい声で「しかし楽しかったな」と、こうおっしゃったんですね。本当に楽しかったって。まず亡くなった村長さんを慕うように「は、あの時は楽しかった」とおっしゃった。そこで私はそんな経験をして、つくづく考えたのが、ご覧ください、表1の「松本大学地域総合研究センター地域づくり学習会・研修旅行計画」であります。それで、この研修旅行ってのは村づくりなんかには重要なことで、あっちでもこっちでも研修旅行やってるんですけど、行った先でですね必ずキーマンとか、オーナーとかそういう人が出てきてくれて、充分に対応してくれる所でなかったら、ただ見ただけでは何もならないです。結局事業というのは人です。人とお目にかかってですね、そしてその現場で説明を聞くのが最高です。

それとまたもうひとつはですね、そのこの所を見に行くんだったら必ずテーマというものがあるんですね。これは行政主導型と、こう私は思います。最近、行政主導型ではなくて住民主導型だとみ

んな言っておりますが、住民主導型って言ったって放ったらかしといたら何も起こるはずが無いんです。それでみんな猫も杓子も生民主導型と言うのは、あれは自分で何もできない事の隠れ蓑にしてですね、行政主導型って言えないんです。行政主導でなんかやろうとしても住民があっち向いて出来なかったりなんかするんで、そこで要するにこれからは住民主導型だと、こういうふうに言って何もしないことの言い訳にしてるという場面が非常に多いんです。ところが清見村は明らかに行政主導型ですね。そのとなりの明宝村はそのパンフレットにうちは行政主導型ですと書いてあるんです。そういうテーマごとに、視察をする必要があるだろうな、こう思うんですね。それからこの研究のポイントってのはいくつもあります、それはこうきちんと明確にしておかなければならない。それで、2番目の欄にですね、必ずそのオーナーだとかキーマンが出てきて対応してくれるって所でなければダメです。ただ行ってもダメですね。そういうキーマンとの人間関係ってのがあって行くのと、何もなくて行くのとでは雲泥の差です。だからこれはどうしても必要だと、こういうふうに思うんです。家へ帰ってきて考えてみて、「あぁ良かったなぁ」と思いながら考えてみると、あっちでもこっちでも視察旅行ってのは行われているんですが、これに叶っているのかどうかということを反省したわけです。

講演会と研修ツアーを組み合わせた本格的な学習会

それで例えばですね、そういう目でこの研修や学習と研修旅行ってのを組み合わせてみたらどんなことが考えられるだろうかなあと思って作ったのが表1なんです。それで、例えばですね、表1の飛騨・美濃の旅の次の欄に飯田市上久堅（かみさかた）ってのがありますが、ここは、キーマンは長谷部三弘さんという方ですね。この人が中心になってもちろんそりゃ多くの仲間がいてみんなそれぞれの一級の人物ですけども、キーパーソンになっているのは長谷部三弘という人です。そしてこれはですね今度は住民主動の村づくりと、これはまったく住民主体なんです。住民が主導して行政とうまくパートナーシップを組んでおる、そういうのです。清見村の場合は行政主導型です。しかし住民が行政とパートナーシップを組んでいるんです。そういうふうに若干のニュアンスが違うんです。それで特に研究のポイントってのは自治会、自治の確立ですね。今まで自治会というのは名前は自治会ですけど行政の上から来る御触れを下の方へ流すと、ただそういう機関に過ぎなかったものが、小さな集落ごとに鎮守の森を中心とした昔の集落ごとにですね、きちんとした村づくりのプランが出来ておまして、そしてみんなやっていくという点ですね。

もちろん老人パワーも生かします。それから表1の老人パワーの下にC.B.Nって書いてありますが、これはコミュニティ・ビジネス・ネットワークです。次から次へと色々なことをやっていきます。例えばコンニャク玉を作っておるんですが安くなっちゃってどうしようもなくなっちゃった時、さあどうするかと。そしたらコンニャク玉を小さな箱の中に入れてですね、絵を描くのが上手な人が絵を描いて、南洋の椰子の木みたいに見えるでしょう。それで、これは「芽出たい植物」だ、とこういうふうに見れば、観葉植物としてもおもしろいんです。食べちゃってもいいんです。このビニールの袋、手袋が入ってるんです。それからソーダが入ってるんです、固めるための。そして、どうやって作るのかレシピが入ってるんです。それで1玉1000円で売っちゃったんですね。なんてったって1000円です、1つ。そりゃ1つ100円にもならないコンニャク玉を1000円で売っちゃったんです。こういうのもってコミュニティ・ビジネスと言うんだと思うんですが、たいしたことじゃないんですけど次から次へそういうふうにして、なんか年寄りの仕事を見つけていったりなんかするわけですね。

それから、今、町村合併がありますから、町村合併しますと今までの村が、自分たちで自分の運命を決定することが出来なくなるわけですよ。当事者能力を失ってしまいます。議会もなげりゃ町村長もいなくなりますから。ただ、ただ合併しちゃうと大きな池の中にドボンと入った水みたい、なんだか分からなくなっちゃうんですね。ひとりひとりの住民ってのは砂漠の中の、砂粒のご

表1 松本大学地域総合研究センター地域づくり学習会・研修旅行計画

	訪ねるところ	キーパーソン (お話を伺いする人)	テーマ	研究のポイント	一般観光・他
飛騨・美濃の旅	大野郡清見村 ・バスカル清見 道の駅 堆肥場 ・育苗施設 農産物加工場 ・工芸展示即売所 ･ホテルバスカル 郡上郡明宝村 ・磨墨の郷 明宝レディース	村長 村岡法泉氏 助役 松葉晴彦氏 商工観光課長 国田義道氏 明宝レディース 社長 本川栄子さん	行政指導型の村づくり		・高山市町並み、祭会館 飛騨国際生活文化センター ・郡上八幡町街並 (丸山功氏) 一泊二日
飯田市	飯田市上久堅	長谷部三弘氏 他風土舎一同	住民主体の村づくり	・自治会自治 ・鎮守の社の村づくり ・老人パワー ・C、B、N ・コミュニティビジネスのモデル ・町村合併と自治会自治 ・自給自立の村づくりモデル	・村民との懇談 一泊の要あり
小川村	上水内郡小川村 ・小川の庄	小川の庄社長 権田市郎氏	企業主体の村づくり	・コミュニティビジネスの典型 ・高齢者の雇用と生き甲斐 ・中山間地活性化	
下伊那	下伊那郡南信濃村 ・八重河内 やまめの郷 下伊那郡天竜村 ・神坂 ゆべし生産組合	山崎民子氏 関京子氏	女性起業による村づくり	女性パワー	
飯山市	飯山市戸狩	森山茂夫氏 金崎昭夫氏	民宿グリーンツーリズム 学習運動と村づくり	・豪雪地帯 ・水田単作地帯の村づくり	
栄村	下水内郡栄村	高橋彦茅氏 島田力氏 保坂良知氏	地域特性を活かした村づくり	豪雪地帯、辺境地の特性を活かした村づくり	
宮田村	上伊那郡宮田村	田辺氏	集団営農、宮田モデル	あまりに立派で遠くから山をみているようなもの	
伊那市	グリーンファーム	小林史男氏	農商連合の直売所	最も成功している直売所	周辺に巨大な農業テーマパークあり
筑北	東筑摩郡麻績村、坂井村、坂北村、本城村 ・別荘地、スキー場、レストラン 観月苑、シェーンガルテン	依田村長 高野助役		麻績方式の地域開発	曼陀羅の郷 4ヶ村周遊
滋賀県	滋賀県犬上郡甲良町	山田禎夫氏 山本町長 他	グランドワーク方式による村づくり、人権尊重の町づくり	官民協力、住民主体 学習による村づくり (無限塾→婆娑羅学校) せせらぎ遊園の町づくり	びわ湖 湖東三山
京都府	京都府船井郡園部町	野中一二三町長	首長がその気になれば 目をみはる町政	・土地基盤整備 ･道路行政 ・子宝条例 ･商品券条例 ・森林、農地管理条例 ・国際交流会館 ・マルチメディアセンター ・女性センター ･日曜市 ・るり溪 ･諸施設	京 都
沖縄	沖縄県那覇市他	冒険王社主 佐和田安行氏 柏屋ホテル 亀谷修身氏 具志川市職員 宮城好江氏	沖縄の活力	・公設市場の賑わい ・柏屋ホテルの人々 ・喜納正吉氏のライブハウス ・金武町 金武部酒造 : 他	島内一般観光
ネパール	ネパール サンジャニ県アクラン村	ガニッシュ・グリーン ベンショク・サクラ ...バイデア夫妻 マドゥスダン・シュレスタ 三浦雅司		・女性パワーによる村づくり (アマビカズ・メリ) ・村落共同体の中の女性達 ・カーストの実態 ラッキースナール ・マイタ・クマリ・グリーン ラディ・クマリ・グリーンの遺跡 ・学校、ゴーマヤ・ミス、土水道 ライスミール、道路、寺 女性集会所	一般観光コース
蛭川村	岐阜県恵那郡蛭川村 ・岩本石材、博石館、ピラミッド 地ビール、レストラン、結婚式 ねころびの森、プートの森 ハガキ商品券、石のトイレ、石の風呂	岩本哲臣氏	生き残り企業の生き残り 努力	40社あった石材店が3~4社に 生き残り企業の生き残り努力	恵那峡

とき大衆になってしまう。ところが、砂粒でも水を一滴落とせばそこへ固まりますが、と同じように今ある自治会あるいは区、集落ですね、そういうものがなんかこう、自立できるような仕組みを今のうちから作っておいて合併しなかったら、これは惨めなことになるだろう。そういう合併前の人たちが視察に行ったりするにはこれはとてもいい村だと思うのです。だから、テーマですね。研修のポイントって言うのはそういうもんだと、こういうふう思うんです。

その次は小川村なんですが、これは対応してくれるのはあそこの権田市郎（ごんたいちろう）という小川の庄の社長であります、しかしこれは企業が中心になってやった村づくりということです。コミュニティ・ビジネスの典型的なものです。それから高齢者の雇用と生甲斐とかそれから中山間地の活性化だとか、そういうものを主として見るのだったら、こういう所も見たらよかろうと。

その次の下伊那なんかの場合には南信濃村とか天竜村、これは女性起業家、女性が業を起こす、起業家による村づくりと、女性パワー、こういうものだと思うんですね。そういうものの勉強に行くんだったらこういう所がいいんだらうなと。それで出てくるのが山崎民子（やまざきたまこ）という、これはもうものすごい、僕がこれは山の中に、僕のとても優れた妹を置いてあるようなもんだと、こう言ったんです。そしたら松本の連中が大勢で視察に行ったんです。で、僕はちょうどそのとき行けなかったんですが、そしたら連中が帰ってきて言うには「いや先生、あれは妹じゃないわね、姉さんだ」とこう言ったんですね。それくらい元気なかたですね。それから関京子（せききょうこ）さんなんてのは、ゆべしで時々登場する人。こういう人、だから女性起業家による村づくりと。女性パワー。

それから飯山では戸狩を中心としてですね民宿グリーンツーリズム。それから学習運動と村づくり。これも昭和20年代からずっと学習してきた連中が現在年老いてですねいるんですが、この老人たちがやっぱりちゃんとしているから、若い連中がまた活発に出来るというところがあります。こういうふうにして、下水内の栄村、これはまあ豪雪、7m85ですか、とにかく豪雪の村で辺境地ですが、その中でそういうところを逆に利用してやっている村づくりと、こういうようなことです。

それから宮田村というのがありますが上伊那に、これは全村、集落営農のモデルみたいな所ですから、これはあまりにも巨大ですね、なかなかちょっとやそっと見たって分かるものじゃないし、すぐ真似できるものじゃありませんが、そこには集落営農の宮田モデルと書いてありますが、これは田辺（たなべ）さんと書いてありますが、しかしこれは田辺さんというのは農協マンです。役場には朝日（あさひ）さんという方がおられました。普及所に唐沢（からさわ）さんという人がいました。この3人が実に絶妙なコンビネーションで村に献身して、それで宮田モデルってのができたんですね。まあその他直売所なんかを見るんだったらグリーンファームだとか、もっとでっかいのはいっぱいあるんですけども、こういうところも必ず見たほうがいいと。

それから筑北では筑北4ヶ村の、まあこれからやられる村づくりであります、それから滋賀県の甲良町なんてのは「せせらぎ遊園のまち」っていうんで、これはもう官民一体、官民というか行政、まあこれも行政主導です。行政主導ですけど清見村と同じようです。住民がそれに呼応してですね実にうまい具合な村づくりができております。

それから、京都の園部なんてのがありますが、まあこれは書いてあるのを読んでもいいんですが。それから沖縄県なんか、農村の婦人団から、となりの町か村でなければ旅行に行かないなんて、これはあれですね。あるとき、ここにもいらっしゃるが突然私の所へニュージーランドのクライストチャーチかどこかから手紙が来まして、そこへ見に行った人がいるんですね、この中にいるんですよ、その人が。ゆとりもお金もあるんでしょうね、きっと。だいたい農協観光にだまくらかされてどっかに連れてかれちゃったりなんかするんですよ。これはやっぱり、もう少し学習と研修のですねきちんとしたツアーをやったほうがいいだろうなと、そういうふう思うんです。

それからネパールってのがありますが、これ少し飛んでますよね。ネパールにアクランという村がありますがこれは女の人ばかりですね、自分たちで稼いで、補助金なんてひとつも無いんですが、自分たちで稼いで、それはそれは素朴ですけども実に立派な村づくりをやったところがあるんですね。だからどっか行くんだったら、ヨーロッパなんか行くんだったら、こんな所へ行ったらかなり安いですからね、なんしろ。だからここへ行ってその感動の涙を一緒に流してきたらいいなあと。ヒマラヤへ上がる月かなんかを眺めながらね、感動の涙を流してきたら人生観が変わるんじゃないかと。私はそこへ行ってですね人生が変わっちゃったです。本当に人生が変わったような気がするんですね。なんにも無いところでやるんですから。それでまっそんなところを見に行ったらいくらも掛からないです。自らそういうところへ行ったらいいだろうなあとまっそんなことです。

それから岐阜県蛭川（ひるかわ）村というのがありますが、これは博石（はくせき）館というのがありまして、とにかく石の村、四十数社あったのがですね。今どンドンンドン不景気の中で潰れていっちゃうんです。3軒か4軒しか残らなくなっちゃった。その中の1軒がですね恵那風土舎ってのをやってるんですが、その社長や、あるいはまわりの連中がどのように、今日まで生き残る努力をしてきたか、そういうのを見るんだたらこういうところかなあと、そう思うんです。

松本でも、新経営研究会かな、とかいうところのおじさんたちをご案内して私行ったことがありますが、まっこういうふうにしてやっていこう、そしてまず第1に、第1回目に清見村のね助役さんに来て頂いてお話を聞こうと。そしてやがて、来年の春にでもなったらですね、この158号線、安房峠ってのはトンネルが出来まして割りかし簡単に行けますんで、そこへ行ってね、そりゃもちろん、なにしくたって高山へ行って祭、高山屋台会館なんか見て帰ってきたい人なんていっぱいいるんですけど、だから清見村まで、ちょっと足を伸ばすと、となり村ですから行ってですね、そして清見村がどんなことをなさっていたのか、今日まっそのお話は聞きますから、それを現地に立ってみるとまた実に違うんですね。パスカル清見という、なんかこういう公園みたいな道の駅みたいなのがあったりなんかするんですが、その一角に私は、本当に人目につかない一角の所にですね、花壇があったんです。私は街を花いっぱいにする会の仲間であり、それでコンクールなんかやってるんでその審査委員長なんかをやってるんです、松本で。で、そういう目でパッと見たんです、誰も見になんか行かない所です。遥かかなたの庭の向こうのほうにあるんですが、行って見た。そうしたらやっぱり隅々までちゃんとね、そのデザインから、それから配色から、それから育成具合から手入れから、もう実によく出来てるんですね。それはもう隅々までいってましたね。あれ見て松本はね、日本花いっぱいの会の中心だなんて言ってるけれども、恥ずかしくなりました。それでこの、今日の第1回目ができたというわけです。第1回目の研修会がここではじまるわけです。

3. 村づくり、企業づくり、煎じ詰めれば……………

さて私はその前座であり序論をやるわけでありますが、ここにですね「村づくり企業づくり煎じ詰めてみれば」という資料があります。これは以前に『八十二銀行の経済月報』に書いたものなんです。本日、私に許された時間が1時間ですから、私はおしゃべりですから少なくとも3時間くらい話さないと消化不良をおこすんですね。それを1時間でやるわけですから、1時間って言ったってもう後30分くらいしかありませんから。これは読むのが1番いいです。読んでもらうのが1番いいんですけども、やっぱりこのダミ声で読むのと、少しまた受け取り方が違うと思いますから、大急ぎで読んでみます。

「昭和23年からこんにちまで40年以上も村や町を歩いて様々なことを見聞きしてきたが、村づくりでも企業づくりでも、これは本物とか、あゝ立派と思うようなものについては、何か共通するものがあるような気がするのである。煎じ詰めてみると、それは次のような一連の流れの中に見ることが出来るような気がする。」

今日のお話もですね、「これは」と思うような村づくりについてであります。こういう観点で聞いていただいたり、或いは現地を見ていただいたりしたらいいんだろうなと思いますが、第一に「そこには人生の開眼のうたがある」。なんでごく普通の人がああいうふうになっちゃったのか。第二に「そこには仲間づくりの物語がある」と、ひとりじゃできません。3番目に「そこには技術論、学習論のドキュメントを見るようだ」。4番目に「それは風土という舞台の上で演じられるドラマだ」と。5番目に「そこからは理想の未来を目指す旅立ちの歌が聞こえる」。まゝ人生開眼の歌なんてのは、これはいかにもなんだか文学老人の表現みたいです。

「人生の開眼の詩」

人間誰でもやる気があるものだと思ふ、やろうかな、やめよかなと気持ちは動くけれどもやってみれば足を引っ張られる、失敗すれば踏んづけられると、やっぱりやめとおこなふと考えることが多いような気がする。まったく人の一生を振り返れば途中まで考えてやめてしまったことが累々と山のように重なっている。けれども時には暗闇の中で擦ったマッチの炎のように、小さなやる気の火を灯し、心の中でそれを育てて、何を言われてもいいじゃないかと、この世に自分が生きた証としてやってみよう、人生をかけてみようなどと考える人はいる、そういう人が必ずいる」私は松葉さんはそういう人の典型だと思っています。「大勢で力を合わせてやっているように見えたとしても100人が一度に1歩前進するなどということはありません。必ず最初に目を開いた人がいる。1人の100歩前進か、100人の1歩前進かという議論がなされたことがあって、戦後の民主主義教育では100人の1歩前進を上位に置いてきたが、消防団の訓練ではあるまいし『1歩前へ』といったらみんな1歩前進するなどということはずいぶん、実際には100人が1歩前進したように見えるときには、ひとりの人間の1000歩も10000歩もの前進があるものだ。1人の100歩か100人の1歩かという不毛の議論をしていた頃、私は中国に1人出家すれば九族（きゅうぞく）天に登るという古い言葉があることを知ってうんと唸ってしまったことがある」これもね100人の1歩前進のほうがいいなのはあれは、1人で100歩前進するのをやめた人の言い草ですよあれは。戦後民主主義の社会教育の担い手たち、これに対していつか一矢報いてやろうと思っていましたけど気が小さいから言いませんでした。でも今日は、今日っていうかここに書いたからね、しょうがないですこれは。その100歩前進した人のモデルがこの次登場するわけです。

「仲間づくりの物語」

人は何かやろうと志した時、自分の力の小さく、また弱いことにいやというほど気づかされるものである。普段は自分もほどほどではあると思っていたものが、いざとなると力が足りない、知恵が足りない、足りないものばかり。そうなればその人はやる気の炎をまわりの人の心に移すことを考えるだろう。仲間づくりの始まりだ。このとき『俺のオリジナルだ、俺の考えだ』と言い立てると、『あゝそうかい、どうぞご自由におやりください』と言うことになってしまう、仲間づくりもうまくいかない、できた仲間も分解してしまう。夜明けに鳴き出す鶏だって先に鳴く者、後から鳴く者があるのだけれど、それぞれに一斉に精一杯に鳴いているのだ。ひとりの人間が言い出したとしても仲間たちは自分も前からそう思っていたように人生開眼を経験する共同体験だ」そう思いましたね、清見村行きました。堆肥場の責任者をやっている人を見てそう思いました。「そのひとが地域やその企業で自分の人生を構築しようとしている時、その地域や企業の中でもつ暗い感情は、仲間にとっても暗い感情であるに違いないから、暗い感情をバネにして考える限り共通の問題意識ははじめからあるはずなのである。開眼した人がいて何人かの仲間も開眼したら、もう、事も半分以上出来上がったも同然だと思う。反対にお役目で集められた地域活性化委員会などでの黒っぽい洋服のおじさんたちの論議を想像するがよい。無難な構想は出来上がっても日本国中みな同じ、た

いした仕事にはならない。仲間で企ててみんなで協力して成功したとき、この喜びは人間の喜びの中で最上位に位置付けられるものではあるまいか。夏の高校野球を見ていればそれがわかる」

「技術論・学習論のドキュメント」

何かが始まれば次々と障害が立ち現れると、しかしこの場合問題が具体的だし、したがってテーマがハッキリしているから手順を間違えさえしなければ大抵解決していく。自分、あるいは自分たちでできなければ人に頼むことになるが、出来る人を見つけて頼めば解決は目の前だ。ただ、問題なのはうまく解決しなかった時に、問題を一般化して見えなくしてしまう習性が人間にはあることだ。行く先が分かっているけれど、いつかは行き着けるのに、行く所が分からないで道を聞いているような場合が意外にも多いと」例えば、農村で嫁のきてがないとか、農家に後継ぎがないとか、こういうのは問題を一般化しちゃってるんで、いくら言ったってどうにもならない。で、結婚相談事業とか高齢者対策事業とか、そういうのは興ってもですね、ひとりひとりの問題解決にはなりません。「こういうときには一層困ったことに実践主体もぼやけてしまって、リーダーがいなくてとか幹部に指導力が無いからということになり、リーダーも幹部もみんなバラバラでとか、意識が低くて、ということを行い、俺がやるという人がいなくなってしまう。幹部だろうがヒラだろうが、実践主体は俺だと考える。技術論の第一課題は、やるのは自分と考える。つまり自我の確立であり、第二課題は何をやるのか、つまり問題の把握である。学習論、技術論。学習論は技術を主要な内容とする。地域づくりも企業づくりも本物は技術論学習論の素晴らしいドキュメントである」つい昨日私は愛知県のある素晴らしい村づくりやっていると見てきましたですね。ところがそこのおっさんが、71歳だと言うおっさんがですね、まっこっちから行った人がみんな色々な質問をするんですよ、これはどれくらい掛かったかとかこの建物はどういうふうにして造ったかとか聞くんですが、「この建物はどっかから貰ってきたよ、放ってあったんで、これは不法建築です」不法建築なんですね。だって不法建築は手がうしろに回っちゃうんですが、不法建築で怒られない方法と言うのがあるんですね。まっどうやってやるかってここで説明したら難しいから、欲求不満に陥った人はあとで僕の地域総合センターへおいでください。時間無制限で話せるかと思います。押しでもだめなら引いてみななんて言葉がありますけれど、いかに押しでも自分の考え方を貫いていってしまうとそういうのをまあ、技術論、あるいは学習論だと。

「風土という舞台で演じられるドラマ」

その土地で泣かされているものにこそ生かすべき何かがあると。寒さも雪もそれを生かせと、三沢勝衛（みさわかつえ）先生は教えた。こうしてみれば日向も日陰も傾斜地も低湿地も礫土も重粘土も川霧も風さえも価値があってしかも無償でそこにあるのだと。市場性経済の豊かさから有価値無価格の風土の個性を生かした産業こそコスト競争に生き残れるものだとと言われる。農業でも商工業でも長い歴史の中でそうなっていると。見事に風土の個性を引き出してそれを世に出していくドラマが今も展開されている」まっ清見村もそうですね。広大な村でなんてったって村の端から端までここから伊那へ行くくらいあるんですね。それで山また山であります。人間の数より牛のほうが多い村、そういう村でね、まっとにかくみんな清見村へ清見村へって何で行くのかと。まっそういう風土を見事に生かしたドラマがそこに展開していると。

「理想の未来を目指す旅立ちの詩」

「派手な観光開発やイベントには後ろを向いているのではないかと思われるようなものがある。儲け本位の企業にもそういうものが無くも無い。国の未来が見えにくい時代だからと言ういいわけも聞こえる。しかし村や企業が後ろ向きでよいという理由にはならない。村が光り企業が光り日本の大地に旅たちに向けての唄がおこれば、国もまた理想へ向けての足取りを確かなものにしていく

だろう」もう国がおかしくなっちゃってますからね。小泉首相の悪口言っても、もうなんともしようがないですよ。だってああいうのを選出したのは僕らですから。そうするとせめて上に立つ人が何やっているか分からないと、まゝ將軍は決断力を失い諸大名は自分の懐ばかり考えて地位に便々とし、役人は賄賂ばかりとっているという幕末とよく似ていますが、そういう時代にあってどうするかって今から立候補したって衆議院議員になるわけにはいかないし村会議員にだってなれないですよ。じゃあどうするか、そうするとこれはやっぱり自分の人生をどうやってやっていくか、自分の集落の中でどうやってやっていくかと、その集落のあるいは集落自治、集落のレベルあるいは村のレベルで、そのなんと言いますか、将来へ向かっての旅立ちの唄がおこれば国もまた理想へ向けての足取りを確かなものにしていくだろうと、こういうことであります。きょうはまゝそんなふうな観点でね、煎じ詰めてみれば人生開眼の歌、あるいは仲間づくりの物語、あるいは技術論学習論のドキュメント、あるいは風土という舞台上で演じられるドラマ、あるいは理想の未来を目指す旅立ちの歌とそういうようなものを感じ取るおつもりで松葉さんのお話を聞いていただきたいなあと、こう思うんです。

4. 活性化 7つの大切

それでは表2「活性化7つの大切」というのをご覧ください。これは滋賀県に甲良町という町がある。その町、もう何にも無い単作水田のですね、何の変哲も無い町であります。同和教育に一生懸命取り組んでいるんですが、なかなかうまくいかなかった。しかし今は「せせらぎ遊園のまち」ということで非常に、ひとつの村づくりの典型としてそこにあります。私も付き合い始めてもう20年以上になるんだと思いますが、その中で総括してみるとこの「活性化7つの大切」ってのがあったのかなあと思うのであります。

表2. 活性化7つの大切

おおやけ (公) 地域づくり	活性化7つの大切	わたくし (私) 自分づくり
<input type="checkbox"/> 地域づくりの目標、理念を一言で	①C Iの明確化 (理念・目標・独自性)	<input type="checkbox"/> 自分はどういう人か <input type="checkbox"/> 何をする人か一言で
<input type="checkbox"/> どんなグループがあるのか <input type="checkbox"/> 何をしてきたのか	②学習プロセスを大事にする	<input type="checkbox"/> 自分が入っているグループ <input type="checkbox"/> どんな仲間か
<input type="checkbox"/> 何をやってきたのか <input type="checkbox"/> やっているのか <input type="checkbox"/> やっていかうとしているのか	③小さな実践の積み重ね再評価	<input type="checkbox"/> 何をやってきたのか <input type="checkbox"/> やっているのか <input type="checkbox"/> やっていかうとしているのか
<input type="checkbox"/> 行政、農協、商工会などにやってもらいたいこと	④行政と住民のパートナーシップ	<input type="checkbox"/> 自分が、自分たちがやるべきこと
<input type="checkbox"/> リーダーはいるか <input type="checkbox"/> リーダーになってもらいたい人は	⑤良いリーダーシップ	<input type="checkbox"/> 自分がリーダーになるか <input type="checkbox"/> リーダーを仕立てるか <input type="checkbox"/> 今いるリーダーを支えるか
<input type="checkbox"/> 行政、農協、商工会の自己変革 <input type="checkbox"/> 自治体の自己変革	⑥自己変革	<input type="checkbox"/> 困ったときは「シメタ！」と云おう
<input type="checkbox"/> 協力してもらえる人はいるか <input type="checkbox"/> 個人の人脈のネットワーク化	⑦専門家の継続的な協力を得ること	<input type="checkbox"/> 自分の人脈(できる人・頼める人)の再点検

C Iの明確化

表2「活性化7つの大切」の左の方は『公・おおやけ』で、これはつまり地域づくりです。右の方は『私・わたくし』、つまり自分づくりです。この2つのどちらが欠けてもいけません。

まず第一に『C Iの明確化』。C Iってのはコミュニティアイデンティティといいますか、地域づくりの目標、理念を一言で言えるように、その甲良町では『せせらぎ遊園のまち甲良』、というふうに言っております。

それから『私』の方は自分づくりです。貴方はどういう人ですか、と問われたときに、自分はこれこれだと答えられないといけないと思うのです。甲良町に即していえば、当初から『せせらぎ夢現塾』という学習、実践の組織があって、地域づくりの中心になった人々は地域づくりと自分づくりを1つのものとして取り組んでいました。構成員の一人一人がしっかりした生活基盤と、地域づくりに対するしっかりした理念を持っているのに感心しました。

ところで玉井さん、貴方は何をしますか？、と問われたら何と答えようか、と、いつも考えます。口の悪い友人達は、『長年人をだましてきたから“人だましの玉井”』などというものもいます。当たらずとも遠からず、というような気もしますが、自分では『暗い感情の御用聞き』をやっている人、と答えることにしています。地域でも個人でも、何かうまくいかないで困っているときに陥るあの暗い感情のことです。暗い感情の本当の原因が分かれば、解釈の道はみつかるものだ、という考えに立っているからです。これが私の学習論や技術論の基本的な考え方です。

ただ、学校の教師ですから、口だけなんですよね。口だけ、言うだけ。松葉さんの故郷飛騨地方には“シャッポかぶり”という言葉があるそうです。シャッポかぶりというのは役人のことだそうですね。もう1つ、『あいつ、シャッポをかぶっちゃった』、というと責任をもたない人になっちゃった、ということだそうです。僕も役人ではありませんが、学校の教師ですから、シャッポかぶりだと思ってしまうね。だって今更どうしようもない、シャッポかぶりなんです。しかし、シャッポかぶりにはシャッポかぶりのやることがあるだろうと。

それはもう、地域や個人の暗い感情の御用聞きだと思ったのです。

幸い、食べるだけのものは与えられ、時間がたっぷり与えられていますから、暗い感情からどうやって抜け出すかという工夫や、企てや、そういうことをやる、それを仕事と心得る、そういう人になろう、と思っています。1人では何もできませんが、松本大学には地域総合研究センターというものがあります。地域のもつ暗い感情に対応して、何でもやろうと考えています。ですから皆さん、暗い感情がありましたら是非アクセスしてみてください。

学習のプロセスを大事にする

次は学習のプロセスを大切にする、ということです。公の方、つまり地域づくりの方では今までどんなグループがあったのか、あるいは何をしてきたのかとか、これが非常に大切なことです。うちの村では老人クラブがあっても、ゲートボールばかりやっていて、なんの役にも立たない、と言ってしまうまでですが、しかし、あそこには何人か人が集まっているのです。6人いなければプレーができませんから。とにかく人が集まった。そうすると人の集団というものは、ただおしゃべりをしているだけだといっても、山の畑で1人で仕事をしていただけの人とは違うのです。

人間の頭の中には約1兆個の脳細胞があるそうですが、働いているのは3%ぐらいだといわれています。あとは休耕田のように、草ぼうぼうと荒れ果て、眠っているのだそうです。バッテリーが上がった自動車のように動かない。

老いていくのはどうしようもない。切ないものです。私ももう十分に年をとりました。クシャミをした途端に屁が出ちゃったりする。『お前は屁か、屁ならまだいい、俺は本物が出ちゃった』なんて言って笑う友達がいる。自動車だったら、元気な車を持ってきて、コードでつないでチャージするじゃないですか。人間の頭脳もチャージできたらいいですね。やる気のかたまりみたいな松葉

さんの頭とチャージできればいいと思うのですが、つなげるコードがない。ところが、ありがたいことに、人間の頭脳、私はこれをバイオコンピューターと呼びますが、これには口がついています。スピーカー付きです。それに耳というレシーバー付きです。互いにしゃべり合うことでチャージしているんです。学習集団とまでいかななくても、集団というものは人の活性化、地域の活性化に大切なものです。地域のどんなグループに入っているのかを改めて考え、それをもとにして何ができるかを検討してみることが大切です。

小さな実践の積み重ね再評価

それから小さな実践の積み重ね。今までやってきたことは大したことではないんですよ。いろいろなことをやってきたが、結局なにもかも中途半端で、などと言っているけれど、何をやってきたのかを再点検してみると、それは自分達が面白いと思ったからやったに違いない。ただ、途中まで行って立ち枯れになってしまっただけなのですね。何で途中でみんな興味がさめてしまったのか、いろいろな理由は上げられるが、それらを1つずつ検討していくと、なんでさめてしまったかが判る。それが判れば、どうしたらよいかも分かる、というものです。

過去に仕残してきたものの中に、案外大事なものがあつたりします。

かつて盆栽クラブというのがあったが、いつの間にかつぶれてしまって、今はなにもない。ところが1人だけ、黙々と盆栽を作っていた人があった。婆さんもなくし、1人暮らしなのですが、ひとり黙ってやっている。盆栽の数は毎年増えていくのだが、私は何か1つ足りないなあ、と思っていました。1年ぐらい前から、また1人の変り者みたいな爺さんが来て、その家の前にオートバイを止めて、中へ入って、焚火なんかしながら話しこんでいる姿がみえた。人事ながら、なにか幸せそうにみえた。

私は中山間地のコミュニティビジネスの1つとして、ミニ盆栽作りを、と思っているのだが、いつかこの2人に話してみたいと考えている。

行政と住民のパートナーシップ

次に、行政と住民のパートナーシップというのがあります。私は、昔から行政や農協の悪口を言ったり、農協と公民館はなくなっても、明日からちっとも困らない、なんて言って悪口ばかり言っていたんです。それで、長野県ではもう、このまんま葬り去られてしまうだろうなあ、と思っていました。

ところが、考えてみたら、行政や農協を憎んでいたわけではないんです。役に立たなかったから恐がっていただけなんです。いや、農家の人々が恐がっているから、代表したつもりで恐がっていたようなところがあります。

だが、こっちがその気になったら、あれくらい役に立つものはないんです。ですから、今一番やりたいのは『農業協同組合利用農業組合』、というようなものです。あの協同組合法というのを生かして、新しい農業協同組合を作ったら面白いだろうなあ、と思うほどです。

シャッポかぶりだといっても、行政の中にもいろいろな人がいる。ずうっとシャッポかぶりのままの人もあるし、時々シャッポを脱いじゃった人もいるんですね。私はそういう人を『人民に化けた役人』、といいます。普段はシャッポをかぶっているんですが、時と場合によってシャッポを脱げる人。シャッポを脱げばみんな同じ地域の住民です。

彼等は見晴らしのよい尾根筋、役所や農協にいますから、ものごとがよくみえている。それに大きな力を持っている。住民と行政のパートナーシップというのは、そういう人を見分けること、そういう人とつながることによってできる、と思うのです。

行政マンや農協マンの中にもいろいろな人、絶対にシャッポを脱がない人、時々チラッと脱ぎかける人、脱いじゃった人。住民もそれを見分けられる人、見分けられない人、シャッポを脱がせ

てしまう人など、いろいろです。

良いリーダーシップ

次が良いリーダーシップ。

うちのほうにはリーダーがいないから、とかなんとかよく言われますが、それを理由にしていたら何にもできません。

“公”の方では、我が村に、あるいは我が集落にリーダーはいるか、あるいはリーダーになってもらいたい人はいるかと問ってみる。いたらその人をリーダーに仕立てる。

いなかったら、“私”の方で、自分がリーダーになるか、リーダーを仕立てる人になるか、今いるリーダーを支えるかですね。

リーダー役の人も、リーダーの力がないなどと言うけれど、人々から支えられたら何をやりだすか分からないほど力が出るものだと思います。

リーダーというものは自分達で作るものです。住民主体というのはそういうことではないでしょうか。住民に支えられた行政マン、農協マンほどやり甲斐のあることはないでしょうね。

松葉さんなんか、この次に生まれ変わっても役場の職員になろうなんて思っているかもしれないですね。

自己変革

それから次に自己変革というのがあります。

“公”には行政、農協、商工会などの自己変革。これはとても大事なんですが、明治以来ずっと続いてきた縦の組織の中に位置付けられていますから、その棚の中から抜けられない。これは集落の中にまでちゃんと通っているんですね。消防団は自治省消防庁直轄部隊だし、老人クラブは厚生労働省の直轄部隊、婦人会は、そこに長野県連合婦人会長さんがそこにいらっしゃるけれど、文部科学省の直轄部隊なんですね。だから、上から下ってくることはやるけれども、さもないことはやらない、と、こういうふうになっているんですね。

婦人会のマークを見て驚いたんです。あれは菊の御紋ですからね。菊の御紋に囲まれて婦人会の婦の字が書いてある。あれでは出られっこないですね。そこにいらっしゃる米窪千加代さんは長野県連婦のトップにいらっしゃる方ですが、それは素晴らしい方です。でもなかなか棚から抜けられない。かつて20万人いた婦人会員が、今は1万人になってしまったというが、棚がそのままだから、棚の中にいるのはいやだよ、と、地域で棚をこわしてゾロゾロ出ていってしまった。老人クラブも同じです。

村で何かやるときに、一番上席は村長さん、次は議長さん、その次は校長先生、消防団長、婦人会長という具合になっています。村長さんは、直接選挙で選ばれた大統領だと思い、いたずらに県や国の役人にペコペコしない、婦人会は菊の紋所を振りかざし、この紋所が目に入らぬか、と開きなおったら地方自治の原点が元気になるだろうし、傾陽の婦人会も生きかえるかもしれません。

ここ、松本大学のある松本市新村の婦人会は斜陽などこ吹く風、元気々々です。

自治体の自己変革なども、これから登場させる松葉さんのお話を聞けばよく分かると思います。

それから“私”、個人の自己変革ですね。私は、『困ったときにはシメタ！と言おう』と言っているんですが、いくら困ったときでも、口だけでいいからシメタ！、と言うだけならできる。言うとならば若干の余裕が出来て、松本大学地域総合センターに相談するゆとりぐらいは出来てくると思うのです。

何が出来るか、今のところは中味が空っぽですが、問題を与えられれば、それなりのことはできるのではないか、と思います。

専門家の継続的は協力を得る

第7番目が専門家の継続的な協力を得ることと、というのがありますね。素人が考えたら3年かかっても出来ないことを、プロというものは恐ろしいものですね。あっという間に出来てしまうものです。それがプロというものです。例えば皆さん、むらづくりかなにかのことで、ドイツに手紙を出そうと思ったって、今からドイツ語を習ってもどうにもならないじゃないですか。ところがうちの学長はドイツ語の先生ですから、この人に頼めば一晩できてしまいますね。自分達の地域に協力してもらえる専門家がいるか、いなかったら、そういう人を知っている人を探せばいい。そういう人脈を作っておくことはとても大事なことです。

よくコンサルタントを頼んで、何か相談して、調査なんかして、報告書を作り、それが終わったらおしまい、というのは足しになりませんね。

一ペン頼んだら、食いついて離れない、スポンみたいにね。雷が鳴っても離さない。さきの甲良町せせらぎ遊園の町づくりには、東京農工大学の教授、千賀裕太郎さんという人がそうでした。今はまた何ができるか分からない松本大学でも、問題を提起されたら何ができるか分からないですよ、こればかりは。問題提起をしないでにおいて大学なんか何の役にも立たないなんて言われたって仕方がないですね。

松本大学は私立ですから、役に立たなければ潰れてしまうかもしれません。大学にもどんどん問題を提起して頂ければ有難い、と思います。地域に開かれた大学、といっているのですから。地域と大学が協力して何かができたと喜びは、地域のためばかりではなく、それによって大学の教師も成長していきますし、学生も成長して、いつか地域のリーダーになることも考えられます。

御覧のように大学は広々としておりますし、きれいですね。ちょっと松本市にも他にはないですよ。それに、地域総合研究センターというものがあります。いつ、どなたがおいで頂いてもよいようになっていますから、どうぞおいで頂きたいと思います。

時間が過ぎてしまいました。これで終らせて頂きます。御静聴ありがとうございました。(今回掲載にあたり加筆、修正をおこなった。)

- 参考資料：八十二銀行『経済月報』2.1 pp.36,37 1990.1
『経済月報』2.2 pp.32,33 1990.2
『経済月報』2.3 pp.32,33 1990.3

講師紹介

[略歴] 1925年、長野県須坂市に生まれる。1948年九州大学農学部卒業。同年長野青年師範学校勤務、信州大学教育学部、信州大学教養学部教授を経て平成2年3月退官。その後、松商学園短期大学教授を経て、現在は松本大学地域総合研究センター研究員。信州大学名誉教授。

[研究実績] 「自己発見の技術」農村漁村分科協会 1988.5、「21世紀への村づくりの構図からみた畜産振興策」農水省報告書 1987、「風のノート」研光新社、「新むらづくり論」信濃毎日新聞社、「老人達のおきみやげ」松本大学地域総合研究センター 2001.9